
永遠などない

斉藤ノブヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠などない

【Nコード】

N2501H

【作者名】

斉藤ノブヒロ

【あらすじ】

オレはアイツを嫌っていた。オレの嫌ってたアイツは突然いなくなり、生きる目的を無くしていたオレの目の前に突然現れたのは・・

第一話

高校生活ももう最後のころ、ほかの多くの奴はもう進路が決まってきたころだろう。受験に合格すれば集団で喜び合う。

オレの名前は岡本昇。

成績は中の下、スポーツは苦手だが出来ないわけではない、容姿も自慢はできない、

しかし、清掃活動は徹底的にする。

そんなオレのクラスにはそいつがいた。女子たちと話をしている。

奴の名前は森田正治。

そいつは成績優秀で、容姿端麗で人にも優しくまさに抜け目がない。スポーツも万能だがクラブには入っていないらしい、生徒会の活動で忙しいそうだ。オレと比べたら比べ物にならなかった。

オレはそんな奴がかっこよくて、すごすぎて、尊敬していて、なんかムカついた。恋い焦がれている・・・とは、また別の何かさえ感じる。

前に奴に注意されたときオレは舌打ちをした、しかしオレの性格上、注意された服装の乱れを直した。

家に帰ってオレは安心する、あんな奴や他の嫌な奴らの顔を見ることもないし、学校以外じゃ見たくもないと思っていたからだ。

朝起きて間もないときにまた学校が始まると考えると少し気が狂った、サボってももうこのくらいの期間になるともう誰も何も言わないだろう、なんてことまで考えたこともあった。そんな気持ちを引きずったまんまオレは教室の中へはいった。あいつはまだ来ていない、とうつすら思っただけでオレはほかの教室へ行った。

そして朝礼が始まり、教室の机に就いた。一同で礼をし、着席すると先生は

「まずはお前らに伝えたいことがある、実は昨日うちの生徒が事故

に巻き込まれたそうだ。」

「えっ？ いったい誰だろう？」小声でたくさん囁き声がした、

「（そりゃ不運だったなあ）」

と、オレはあくびをしながら頬づえをついて横を向いていた。

「しかもそれは……………」

……………森田正治だ。」

「！！！」

それを聞いたとたんオレは驚いた。

「ええ？ 嘘だろう！？」

「もう推薦で大学も決まってる森田くんが！？」

周りにどよめきを感じたが、一番驚いていたのはオレだっただろう。オレはただあまりに衝撃的な出来事だったため声を失っていただけだから。

そんな話を聞かされたあと、書く指もうまく進まないまま午前の授業は終わった。

昼休憩になると、オレは学年主任の先生に聞いた。話によると森田は昨日の夕方頃事故に遭い、午前6時頃死亡が確認されたという。帰りの道、いつも以上に足が重かった。オレの尊敬していた奴が逝ってしまった。

勝ち逃げなんて卑怯じゃねえか、オレはまだまだお前に借りがいっぱいあるのに、競う奴がいなくなってしまうたし、これからオレはどうすればいいんだ、どうすれば……………。そんなことをずっと考えていると前で何かがぶつかった。

「きゃっ！ いた〜い。」

突然少女がぶつかってきた、

「あつ、ご、ごめんなさい！」

その少女にはオレが怖そうに見えたのか少し怯えた声で言った、

「いや、大丈夫だよ。」

と言って少女を見た、……………ん？

「で、では。」

過ぎ去ろうとする少女に意を決して言った、

「待って、君名前は？」

「私は、森田祐美って言いますけど、どうかしました？」

やっぱりオレの思った通りだ、そう思いながらオレは言った、

「君のお兄さんが事故に遭ったって聞いたけど知ってるかな？」

「ええ、はい。」

あいつの何一つとして考えなかったが、こんな妹がいたのかと知ったら驚いた。

オレは、この子のために何ができるのだろうか？

第一話（後書き）

恋愛小説もどきです。
あまり慣れてません。

第二話

11月、森田が事故に遭っておそらく10日経っただろう。森田の死を嘆く者もほとんどいなくなった。周りの者は皆受験で忙しくて、それどころではない。

体育の授行、今日はサッカーだ。クラスで唯一の勝負の要も森田だった。

「おい、岡本！」

そう言くと、ボールはオレに向かってきた。

「よこせ〜！」

「こつちだこつち！」

オレは慌てて味方に渡したが、コートから出てあっけなく相手ボールになった。

「はあ・・・。」

授業は終わり昼休憩、今日は先生に呼び出しをされている。なかなか決められない進路希望調査の紙を提出した。オレには秀でた一芸なんてものは持っていなかった。何もかもを投げ出したいような気分だ。

職員室へあまり誰も通らない廊下を歩いて行った。すると向こう側から少女が来た。オレは大きい声なんて出ないから横切ろうとした瞬間に言った、

「・・・祐美ちゃん。」

「えっ？」

急に声をかけられて驚くのも無理はない、しかし彼女はオレの顔を少し見ると、

「あなたはあの時の。」

驚いた、覚えてくれていた。オレはすかさず、

「放課後、ちよっといいかなあ？」

「あ、はい。」

嫌がると思っではらはらしていた。

昼の授業はやけに眠気が差した、周りの者は皆眠りに落ちていたが、オレは寝ないでいた。起きているのも辛そうな午後の授業も終わり放課後、周りからはいろんな声がした。

「寝みいな。」

「やっと今日も終わったねえ。」

「どつかよってかない？」

オレは静かに教室を後にした。

校門を出て10分ほど待っていると彼女が来た、

「ねえ、祐美ちゃん。」

「なんですか？」

「ここもなんだから、ちょっと来て。」

なんともあつさりだった、オレは人があまり立ち寄らない公園へ連れて行った。

「その……、悪かったね。急に呼び出したりなんかして。忙しかったり、しないかな？」

「いえ、大丈夫です。」

「なんか……、ずっずっしいよね。1、2回しか声をかけてない奴がさあ。」

「慣れてますから……。」

「……。」

オレは言葉に詰まった、そして怖かった。こんなにもオレを慕ってくれて嫌がる素振りすらない子が他にいるだろうか、いや、いやしない。

「……岡本くん？」

「昇でいい、敬語もいらない、オレはそんなことに慣れちゃいないからさ……。」

オレはまた言葉に詰まってしまった。どんな言葉を投げかければいいかと、考えた。オレは勢い余って、

「正治ってどんな人だったの？」

自分でも思いも寄らぬ言葉が出た、何言ってんだオレ！？

「お兄ちゃんね……。」

「……？」

今度こそ嫌われると思っていたのに彼女は真剣だった。

「お兄ちゃんね、とても優しくったの。私の好きなものをよくプレゼントしてくれるし、風邪を引いたら心配してくれてたの。」

その言葉を聞いた途端オレの中で何かが変わった、今まで気嫌いいていたのに、森田を、いや正治のことを。あいつの他の面など考えもしなかった。自分が心細くなった。

「事故に遭ったって聞いた時は驚いた。涙が止まらなかった。」
今のオレならその時嘆いていたかもしれない、オレは何も考えずに口走ってしまった。

「オレが君のために何ができるのかわからない、でもオレが君のために出来ることのあるのなら何でもするよ。」

「……あ、ありがとう。」

彼女は少し照れながら笑った。そんな笑い顔が見れて、オレも嬉しかった。

何も無いように思っていたがいまオレに出来ることは、あるかもしれない。

第三話

12月下旬、雪の降る寒い日だった。今日は祐美ちゃんと約束をしている。お袋には友達と遊ぶと言って出かけた。

「あ、昇くん！」

「……祐美ちゃん。」

「じゃあ行こうか。」

「う……うん。」

オレの急な話だって言うのに彼女は顔色一つ変えずに笑っていた。それが少し怖かった。

「あのさっ。」

「んっ？」

「その……迷惑してなかったかな。」

「別に、そんなことないから大丈夫だよ。」

「……。」

（何を言ってるんだオレは！ 前に約束したじゃないか、彼女を幸せにするって。こんなんじゃないやあアイツの……正治の代わりなんて出来ねえ、今の俺を見ていたら笑われるかもしれねえ。）

オレのなかでは苛立ちすら感じた。

「公園に行かない？」

「うん。」

公園へ行きベンチに座りながらジュースを飲んでいた。……力ツプルじゃない！！ 友達同士だ。

……それにだ。互いに知り合ってまだ深い所にまで行ったことがない。

「ここで君と約束したんだけど、覚えてるかな？」

「うん。すごく嬉しかった。」

「君のために出来ることなら、なんでもするよ」

縁起でもないことを言ったもんだ。

オレのような奴に何が出来るんだ……

いや、考えても仕方ない。

雪道になっていたから少し滑らないかどうか心配だった。特に祐美ちゃんは。

すると祐美ちゃんは花屋に飾られている花を手を取った。それを手に取っているときの祐美ちゃんはとても嬉しそうだった。

「それ、好きなの？」

「うん、お兄ちゃんがねいつもプレゼントしてくれてたの。」

とても妹思いでいろんな人に好かれる、オレは勘違いしていた。

前にプレゼントしてくれると聞いたことがある。ひょっとしてこれのことかな？

こんなやさしい兄を持っていた祐美ちゃんはきっと幸せだったと思う。

「あ、あの、これください……！」

「？」

「君への、贈り物だ。」

「……ありがとう。」

別にアイツ（正治）の代わりにならなくたっていい。祐美ちゃんが喜んでくれるならそれでいい。

第四話

オレはあり得ない夢を見た……。

それはいい夢なのか悪い夢なのか、分らない。

オレがいたのはとある教室の中、周りを見る限り放課後だろう。夕焼けがかつてる。

人の気配は無かった。

「岡本。」

どこから出てきたのかとも聞き覚えのある声、どうしてこんなヤツの声を聞かなくてはならないんだ。

「森田……」

もう聞けないと思っていたアイツの声、二度と見たくない、いや、もう一度だけ会って話したかった。そこには正治の姿があった。

「森田……どうしてこんなところに……」

「驚いたか？ そうは言っても、俺は本当の森田正治じゃない。

お前の心の中で思い描く、別の存在だ。」

オレはまともに森田の顔を見られないまま横目で見ていた。

「……今更何の用だよ。 オレはお前においしいところを散々持ってかれたんだ。

オレはお前に勝てるものが無かった」

「お前、祐美の何なんだ？」

「オレと祐美ちゃんは……、ただの……。言葉に少し詰まってしまった。ただ一つだけ言えるのは、恋人ではない。

ただの……

「友達同士だ。それ以外何も無い。」

「じゃあ。ただの友達同士なのになんでそこまで深入りするんだ？」

「分からない。でも彼女一人では、寂しそうだと思ったから。」

彼女のそばに、誰かが必要だと思ったから。」

やっぱり、逆鱗に触れちまうだろうな。まあ当たり前のことだが。

「……こいつは気に入らなかつた。どんなときも、オレを下に見やがつて。」

オレはお前に迷惑をかけたのか？ まあ結構かけたと思うが。

こいつはいつでも気真面目だった。オレの性格も捻くれてはいた。であるが故、オレには一つのフレーズが思い浮かんだ。

“オレはお前にもつと見てもらいたかつた”

改めて考えてみた。オレは確かに正治を嫌っていた。

でもそれは、ただの照れ隠しに過ぎないのであって、本当は心のどこかで、好いていたのかもしれない。

オレはもうお終いだと思っていた時正治は、

「安心したよ、あいつは他の奴にあまり心開かないようなやつだったから。」

今までに（あいつが生きている時まで）ないような安堵感を抱いていた。

「怒らないのか……」

「よかったよ。一人でふさぎ込むかもしれないと思ったから。」

「俺も安心して眠れることが出来る。でももし祐美を泣かせるようなことがあつたら、やっぱり俺はお前を許さないからな。」

「……分かつた。」

オレは起きると多少汗をかいていた。

二度と見たくない夢だった。いや、もしも出来るんだったら、もう一度だけ、見たいような、そんな夢だった。

第五話

考えてみれば俺はいつもそうだった。相手と仲むつまじい感じになるとオレはすぐに関わらないように逃げていた。

気が付けばそんなことを繰り返していたような気がする。

でも、そんなやり方は間違っている。逃げてばかりいても、何も始まらない。

少なからずだがオレは、こんなことが続いてほしい。 と思っていた。

2月の下旬、世間や他の学校にとっては早すぎと言われそうだがもうすぐ卒業式が行われるときだった。

他の奴らも喜びの余り、その後どこかで遊ぶとか、飲みに行かないかとか、いろんなことを言っていた。

体育館に他の奴と並んで歩いて行き、オレは定位置についた。

ステージに向かって一礼をすると席に座り、校長の話が始まった。

でも周りの奴は後のことしか考えてなくて、この式の後に校長がどんな話をしていたかと問い詰めると、おそらく答えられる奴はいないだろう。

少なくともオレは覚えていないかもしれない。

卒業証書の授与に入った。オレが呼ばれるのは4番目だ。

そして、オレの名前が呼ばれた。

長そつであつという間だった、高校生活が。

オレの目はどちらかというといい方なので、卒業証書をもって席

に戻ろうとしているときに祐美ちゃんのクラスの席を見た。
でも、そこに祐美ちゃんの姿はなかった。

「(??)」

その時はまだ、気にしてはいなかった。

風邪の時期はまだ長引くのか。、と考えるだけだった。

教室へ帰って、最後のホームルーム。もう、思い残すことは何も
無い。

ホームルームも終えて、オレは一人帰って行った。

帰りの道、学校に来なかった祐美ちゃんのことにも気掛かりになった
からお見舞いに行こうかな、

そう思っていた時突然耳にしまった、

「・・・・・・・・・・なんか可哀想だよな」

「森田さんがお亡くなりになっちゃってね・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・えっ!? そんな・・・・・・・・!!」

ダッツッ!

オレは一目散に走った。無謀にはない。

祐美ちゃん、もとい正治の家は前に二人で出かけたときに知ったか
ら分かる。

周りの人間をお構いなしに走り、祐美ちゃんの家に着いた。

「祐美ちゃん!」

「あなた誰ですか?」

「祐美ちゃんの友達だ！ どいてくれ！」

「祐美ちゃん……、祐美ちゃん……！！……」

どうして、俺が幸せにするって言ったのに。

正治とも約束したのに。

どうして、どうして……

そんなことがあって、4月を迎えた。オレは映像関係の専門学校へ行き映画監督を目指そうと頑張っていた。そこでは入学して、それぞれが講師の人々に決意表明を話していた。

「岡本昇。」

「はい。」

「あなたは どうしてこの道を選びましたか？」

「自分は映像を通じて、 見ている人々に感動を与えるようなドラマや映画を作りたいからこの道を選びました。」

二人の支えがあったからこそ今の俺がいる。

あの兄妹の為に、あの兄妹の分も、オレに大事なものを教えてくれた兄妹の為に今を生きる。

それが、俺が今二人の為に出来ることなんだ。

第五話（後書き）

話は以上です。

ご鑑賞いただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2501h/>

永遠などない

2010年10月28日04時27分発行